

潘岳「西征賦」攷

原 田 直 枝

京都大學

序

文學作品は、歴史記述との間にいかなる關係を持ち得るのか。文學作品・歴史記述、そのどちらとしても讀むことのできるような、双方の要素が渾然となつてその持ち味を成している作品が少なくないことは、周知の通りである。

そのような作品に對して、例えば「虚構の文學作品・非虚構の歴史記述」などという硬直した通り一遍の物差を當てるのは、抑も無理であり、作品に即してその本質を見究めようという文學研究本來の目的に向けて有効な手段とは言えない。やはり何と言つても、この境界に於ける、文學作品・歴史記述相互の關係を成り立たせている仕組みを丹念

に検討する手續きこそが、この本來の目的を果たす上で必要なのではなからうか。實際、例えば、歴史文學を對象に、既に記述されたテキストとしての歴史を、文學作品がその素材として攝取していく過程の検討がさまざまに爲されており、ヨーロッパの近代文學に於ける寫實主義の成長と歴史小説との關係、日本の近代文學史上で歴史小説の果たした役割等を考える上で、この視點が有効なことは周知の通りである。一體に、文學作品の中に歴史記述との強烈な關係が導入されるのは、社會史的變動を背景として新たな文學意識が萌芽する時代の、文學全體の動向と應じ合つた現象であり、それ故に、歴史文學或いは歴史テキストを豊富に攝取した作品を手掛に、或る一つの時代の文學意識や人間の精神の在り方を今日から探ることは、大いに意義深いのである。

中國文學に於ても、やはり、歴史記述との關係を熟慮すべき場合が多數存在する。とりわけ、この検討に價する文學史上最初の時期は、いわゆる「玄・儒・文・史」^②の時代の幕開けに當る、後漢末から魏晉の間である。三國鼎立を

挟む激動のこの時期、「文」「史」それぞれの特性の峻別が進むと同時に、積極的な歴史記述との関係を持った、歴史文學と呼ぶことのできるような詩文が現われた。例えば、

「詠史」詩の發達、陸機「辨亡論」、袁宏「三國名臣序贊」等の歴史評論、史書論贊の發達等^③。そして、本論で採り上げる潘岳「西征賦」も、「一篇の史論」^④と評されるほどに、歴史記述との関係を論ずべき作品である。そこに見出される關係とは、すなわち歴史テクストの徹底的な素材化に他ならない。本論では、その素材化の過程を、歴史記述に於ける、編年體の紀傳體に對する改編過程と對照しつつ解明するとともに、このような歴史記述との關係が、後漢以來の行旅賦の流れの上に新たな方向を示す要因となり得たことを跡づけるものである。

—

潘岳「西征賦」は『文選』卷十「紀行」の目に收められている。凡て七七〇句、卷一つを占めるこの長大な賦の最も簡潔な見取圖は、行旅賦の傳統に従って出發の時日、行き

潘岳「西征賦」攷（原田）

先を豫め述べる、その冒頭部分によって知ることができる。

歲次玄枵、月旅蕤賓。丙丁統日、乙未御辰。潘子憑軾
西征、自京徂秦。

歲は玄枵に次り、月は蕤賓に旅る。丙丁日を統べ、乙未辰を御る。潘子軾に憑りて西のかたに征き、京より秦に徂く。

晉惠帝の元康二年（二九二）五月十八日、潘岳自身が晉の今の京・洛陽から秦漢の舊都・長安へと出發した、その旅をモチーフとし、二都の間を旅ゆく「潘子」潘岳自身を、道中で感應するさまざまな外物——「經る所の人物山水」——に絡めて物語り繼いでいく、一種の道行文である。さらに、冒頭に續く篇首での詳細な情況説明によれば、この旅は長安令赴任を目的とする公用の旅で、實に後半三七七句が、長安令赴任後の長安城内・近郊に於ける巡遊の敘述に費されている。このように「西征賦」は、洛陽から長安をめざしてひたすら西進する「旅」の敘述と、目的地長安での巡遊の敘述と、いわば二部構成であり、舊都長安がそこに於て重大な要となっていることが目を引く。これは、

概ね四十三節を數える各節の語りが、潘岳が辿る三十餘の土地を核としてそれぞれ展開されるのと共に、既に後にした故郷や都への係戀よりも、道中に點在する土地土地、そして長安に向ける關心のほうを主とする「西征賦」の敘述全體を象徴している。すなわち、旅の場に於ける敘述、これこそが「西征賦」最大の要因であつて、「西征賦」が行旅賦の系譜に位置づけられるのも、また、行旅賦の流れの上で獨自の傾向を示すのも、共にここに由來するのである。

言うまでもなく、『楚辭』の「離騷」「遠遊」に見られる天界遊行はもとより、地上を行く行旅賦の諸作品に共通するのは、第一に旅をモチーフとすることである。そして、この旅のモチーフは、君臣關係や政治の現場であり秩序の象徴とも言うべき日常生活の時間と空間とから解放された情況なればこそその、自己を主體とする敘述の場を可能にする。従つて、行旅賦の作品個々の持ち味は、その敘述を如何に做し、何を盛り込むか、という手法・内容に懸かってくることになる。ところで、この手法・内容という點で、潘岳「西征賦」に先立つ所謂「紀行」賦、より一般的には

行旅賦^⑦の系譜は、前漢末、劉歆「遂初賦」(『藝文類聚』卷二七)以下、後漢代、班彪「北征賦」、班昭「東征賦」(共に『文選』卷九)、蔡邕「述行賦」(『藝文類聚』卷二七)に於て、この時期の文學作品の抒情化・自律化を率先する主要なジャンルとして一つの類型を示しているが、それは凡そ次の四點に要約することができる。

(一)「志意不得」の情況シチュエーションに立ち、作者の背景にある社會狀況を鋭く反映する。所謂「失志」賦に屬する傾向。

(二)作者自身が語り手として一人稱で語る自敘の形式。

(三)「感今思古」の體裁。歴史記述に取材した内容を語り、經史に依據した措辭。

(四)極めて實景に近い印象を與え、かつ心象風景でもある空間描寫。

このうち(一)は主に内容上の、(二)(三)(四)は手法上の特色と言える。「西征賦」が、道行文として、以上の作品と同様に行旅賦の系譜に列なることは、『文選』『藝文類聚』他の分類をはじめ、既に共通の認識を得ているが、一方で、「西征

「賦」と後漢行旅賦群との間に、決定的な相違があることも指摘されてきている。まず、七七〇句の「西征賦」と、並べて百句前後（「北征賦」は九四句、「東征賦」は八六句、「述行賦」は二三二句）の小品である後漢の諸作品との分量の上での違いは一目瞭然であるが、さらに、高光復氏は「敘事大賦」と呼んでその敘事的傾向に觸れ、中島千秋氏は、「一大長篇であること・歴史故事敘述の詳密・文節目的の傾向・風物描寫中の歴史性・議論的表現・失志慷慨の後退擴散」といった點に相違を見出しておられる。特に中島氏の擧げられた項目は、前に整理した後漢行旅賦の手法・内容上の類型の諸要素が、「西征賦」に於ては擴大または後退の變化を遂げていることの指摘と言ってよい。要するに、小品でしかも抒情性に勝る後漢行旅賦に對して、「西征賦」は〈敘事的〉^⑩傾向を呈する大賦、という特色を持つのであり、この作品の性格の相違は、手法・内容のレベルでの相違として認められるものなのである。そうであるからには、「西征賦」の〈敘事性〉が、その手法・内容から如何に生み出されるかの過程を検討しなくてはならない。それこそ、本

潘岳「西征賦」攷（原田）

論の意圖するところなのであるが、しかしここでいきなり後漢から西晉へ話題を進めるのは、行旅賦の流變を跡づける作業としてはあまりに性急なことである。やはり、「西征賦」で顯著になった〈敘事的〉傾向の下地となるような動きが、後漢・西晉間に既に萌していたのではないか。その流れを承けて「西征賦」はそれを昇華したのではないか。このような見通しの下に、「西征賦」の具體的な検討に入る前に、まず、漢魏の際と晉初との二點での行旅賦の傾向を押さえておくことにしたい。

二

漢魏の際、主に建安年間（一九六—二〇〇）には、從軍行旅賦が多數作られた。ここで從軍行旅賦と呼ぶのは、例えば、『藝文類聚』卷五九・武部「戰伐」所載の作品、應場「撰征賦」、王粲「初征賦」、曹植「東征賦」、徐幹「西征賦」「序征賦」、阮瑀「紀征賦」、陳琳「武軍賦」「神武賦」等、主に「〇征賦」と稱される作品である。「戰伐」という分類からわかる通り、建安文人たちが曹操の戰役に従った際の

作であり、軍旅・陣中という特殊な状況を反映して、諸篇には、盟主を考慮した武功の頌贊と、従軍風景描寫に於ける（敘事的）傾向とが目立つ。このような性格のために、従來、後漢行旅賦の後繼として直結されることもなく、また、五言詩や、後漢に萌した抒情文學の開花等の建安文學の目ざましい動向の中では、確かに、主流に位置づけられるものでもない。しかし、今、従軍という外的情況に拘わりさえしなければ、これも一つの旅をモチーフとした行旅賦に違いなく、しかもその内容・手法上で（敘事的）傾向が目立つことは、この従軍行旅賦を「西征賦」に通じる一段階として位置づけるべき重要な條件であると思う。殘念なことに、従軍行旅賦で今日完全な形で傳わつていないと言える作品はないが、そのうち比較的分量も多く考察に堪えるものとして、ここに徐幹「序征賦」を擧げてみよう。

余因茲以從邁兮、聊暢目乎所經。觀庶士之繆殊、察風流之濁清。沿江浦以左轉、涉雲夢之無陵。從青冥以極望、上連薄乎天維。刊梗林以廣塗、填沮洳以高蹊。寧循環其萬艘、互千里之長湄。

余茲に因りて以て從い邁き、聊か經る所に目を暢ぶ。庶士の繆れると殊きとを觀、風流の濁れると清きとを察る。江浦に沿いて以て左のかたに轉り、雲夢の陵無きを渉る。青冥に從いて以て望を極むれば、上は天維に連なり薄る。梗林を刊りて以て塗を廣くし、沮洳を填めて以て蹊を高くす。寧りて其の萬艘を循環せしめ、千里の長湄を互る。

「江」「雲夢」と、江南を直ちに想起させる經過地名が見えるが、俞紹初「建安七子年譜」^⑫は、この二句を引いて、これを建安十三年（二〇八）荊州征伐、赤壁の役に従軍した時の作とする。語りの主體は、冒頭によって「余」徐幹とわかる。その「余」の目に觸れた行軍風景として、軍路確保のための「刊梗林」「填沮洳」といった營み、「萬艘」「千里之長湄」といった勇壯な光景が描寫されている。本當に實景かどうかはともかく、この場で見える限り、行軍の勇壯を傳えること自體を事とし、盟主頌贊や阿諛まで含めて語り手の情や志は一切、雜っていない。行軍という情況に忠實な景物描寫と言えるだろう。

行兼時而易節、迄玄氣之消微。道蒼神之受謝、逼鶉鳥之將栖。慮前事之既終、亦何爲乎久稽。乃振旅以復蹤、

泝朔風而北歸。及中區以釋勤、超栖遲而無依。

行は時を兼ねて節を易え、玄氣の消微するに迄る。蒼神の謝を受くるに道い、鶉鳥の將に栖わんとするに逼る。前事の既に終われるを慮りて、亦何爲れぞ久しく稽まらん。乃ち旅を振えて以て復た蹤い、朔風に泝いて北に歸らん。中區に及びて以て勤を釋き、超として栖遲して依る無からん。

初四句は、從軍下で迎えた季節を追って示したものの。建安十三年十二月、翌十四年三月、七月、と、今『魏志』武帝紀の記載に合致する。「蒼神之受謝」は『楚辭』「大招」の「青春受謝」を踏まえたもの。また「鶉鳥之將栖」は「鶉棲」が季夏を示すことを踏まえたもので、例えば張衡「應閒」〔後漢書〕卷五九に「溽暑至而鶉火棲」と見える。このように、旅の出發の時日以外に、道中で過ぎ去る時間や季節を記す手法は、後漢行旅賦には見られなかったものである。⑭そして、この季節の移ろいを伏線とするかのように、

潘岳「西征賦」攷（原田）

次に望郷と旅の倦勞の敘述が續くのを見て直ちに想起するのは、やはり「古詩」十九首中の季節と悲哀の關係である。最後の望郷・倦勞の敘述は、再び行旅賦とも近い、常套的表現が目立つ。「泝朔風而北歸」は無論「古詩」十九首「胡馬依北風」に據るもの。「及中區以釋勤」については、蔡邕「述行賦」に「赴僂師而釋勤」が見える。この部分は、ちやうど、前半の冒頭が「余因茲以從邁兮、聊暢目乎所經」以下、旅の開始・再開を示す常套句を準用していたのと呼應する格好で、述志性はやや希薄ながらも從來の行旅賦に通じる表情を「序征賦」の上にもたらしめている。實は「序征賦」は、前に例擧した多數の建安從軍行旅賦のうち唯一「歷代賦彙」の「行旅」部（外集卷九・卷十）に、後漢行旅賦や「西征賦」と共に收められているのだが、⑮その分類の理由もこの點に求められるのかも知れない。旅の進行を示す常套句と、緩急の差はあれ自敘性と、主にこの二點が「序征賦」で繼承されているのである。さて一方、この作の半ばの軍旅描寫と季節經過提示とは、この作品の「從軍」行旅賦たる持ち味を成す部分と言ってよい。ここに窺われる

のは、旅の場——ここでは行軍——に即した描寫の態度、つまりまさに經る所に感じての敘述であり、それは後漢行旅賦に於ける、豫め語り手に内在する志や情を「過る所に託す」(蔡邕「述行賦」序)という形の敘述とは明らかに異なるのである。「序征賦」は、これによって一種の〈敘事的〉傾向を呈するに至っている。

以上のような傳統の繼承と微かな新傾向とは、「序征賦」以外の、より武功的要素の強い作品にもまま認められるが、分量・内容の上でやはり「序征賦」が最も明確である。とは言え、その「序征賦」でさえも未だ新舊の要素が煮詰まらぬ過渡期的状態が目立つごとく、建安の從軍行旅賦について確實に評價できる點は、それ以前の後漢行旅賦の順當な繼承の外に、行旅賦の發展の方向を見出す先鞭をつけた、ということに止まるであらう。それが具體的には、切迫した感情の拂拭、旅に即した描寫敘述、という形で現れているのである。後に、宋の謝靈運は「歸塗賦」(『藝文類聚』卷二七)序で、行旅賦製作に繋がる外的要因を四通りに擧げている。

昔文章の士、行旅の賦を作ること多し。或いは國を觀るに在るを欣び、或いは斥け徙うつざるに在るを怵おそれ、或いは邦邑に述職し、或いは戎陣に羈役かひやくざる。事は外に由り、興は己に自らず。……

うち、「羈役戎陣」とは從軍の場合であり、建安の從軍行旅賦はこれに該當する。建安の文學を通じて、とりわけ五言詩の中で「旅」のモチーフがたびたび現れ、定着していったことは、王粲や曹植を引ひき合あひに出すまでもなく周知の通りである。行旅賦がそこに如何に與かつたのか、これも詳しく論ずべきことであるが、ここでは、行旅賦が、謝靈運の分類に見えるように「從軍」を含む多様な要因に對して順應性を持った表現の場として幅を擴げていく過程として、建安期に於けるその關わりは無視できないことを指摘するに止め、この建安期に次ぐ「西征賦」への段階として、晉初、張載の「敘行賦」へと話を進めることとしたい。

張載「敘行賦」(『藝文類聚』卷二七)の製作年代を確定することはできないが、その冒頭に敘べる都から蜀への旅と

は、『晉書』本傳に「太康の初、蜀に至りて父を省^すね、道すがら劔閣を經^よ」と記すのに相當することから、太康初、二八〇年頃という見當はつく。⑩ 潘岳「西征賦」の旅（二九二）とは十年足らずの差であるから、ほぼ同時代の作品として考える方が穩當かも知れない。ともかく、西晉の初めに繼承された行旅賦の形を知り、「西征賦」の考察の資とするには格好の材料と言える。なお、張載と蜀、と言えば直ちに思い起こされるのは、左思が「三都賦」を作るに當って、自らは不案内な地方である蜀の事柄について張載に聞いたという故事（『文選』卷四「三都賦序」題下注引臧榮緒晉書）であり、また、この入蜀の際に張載が作った「劔閣銘」は『文選』卷五六に收められてもいる。

歲大荒之孟夏、余將往乎蜀都。脂輕車而秣馬、循路軌以西徂。朝發軔于京宇兮、夕予宿於穀洛。踐有周之舊墟、槐丘荒以寥廓。讚王孫於北門、問九鼎於東郭。寔公且之所卜、曷斯水之瀆薄。……勤大禹之疏導、豁龍門之洞開。歲大荒の孟夏、余將に蜀都に往かんとす。輕車に脂して馬に秣^{まぐさ}い、路軌に循いて以て西のかたに徂く。朝に京

潘岳「西征賦」次（原田）

宇より軔を發し、夕に予穀洛に宿る。有周の舊墟を踐めば、槐丘荒みて以て寥廓たり。王孫を北門に讚え、九鼎を東郭に問う。寔に公且の卜する所にして、曷ぞ斯水の瀆薄たる。……大禹の疏導せるを勤^{おぼ}い、龍門の洞開を豁^{ひら}くとす。

この「敘行賦」は、篇内の構成が極めて几帳面で、地名提示によって旅の進行を示す前半と、景物描寫によって示す後半との對照がはっきりしている。まず前半。冒頭の六句は、一見して明らかかな通り、『楚辭』以來の旅行開始の敘述の型を踏んでいる。「踐有周之舊墟」以下、通過する地名によって旅の進行を示す部分では、一、二句間隔で次々と「○○（土地）の□□（形状）を△（張載の動作）する」（「△○○之□□」）の句型が重ねられていくのが注意を引く。そしてこの「○○」に當てられた地名は、省略した部分には他に、函谷、新安、二嶠、潼關、華岳、が見え、要するに洛陽・長安間でも指折りの歴史的故事に富む土地で、くだくだしい修飾を加えずとも、その名一つで容易にかつ豊富に歴史的イメージを喚起する、いわば歌枕的な機能を持つ

ものばかりである。もとより、行旅賦に於て、故事に富む地名を歌枕的な契機として、それに因む歴史的イメージを操り廣げること自體は珍しくもない、傳統的な要素である。

しかし、地名提示の後に續けて數句の故事回想を連ねる形をむしろ常とする從來の場合に比して、この「敘行賦」で、具體的な故事にほとんど言及せず土地の空間的な有り様を暗示する形容のみを補って、地名一つ一つに歴史的イメージの一切を委ねるのは、地名に具わる歌枕的なイメージの喚起力を極度に凝縮した形で機能させたものであり、まさに道行文に通じる手法と言える。實は、これと同様の地名の喚起力が、「西征賦」に於てはこの「敘行賦」と反對に鋪陳の形式で示されるのだが、それについては、後に改めて論じることとなる。

後半の景物描寫は換韻によつて二段に分れる。

舍予車以步趾、玩卉木之璀璨。翳青青之長松、蔭肅肅之高杵。緣阻岑之絕崖、蹈偏梁之懸閣。石壁立以切天、岌嵬隗其欲落。

超陽平而越白水、稍幽臺以迴深。秉重巒之百層、轉木

末於九岑。浮雲起於巖下、零雨集於麓林。上昭晰以清陽、下杳冥而晝陰。聞山鳥之晨鳴、聽玄媛之夜吟。雖處者之所樂、嗟寂寞而愁予心。

予が車を舍めて以て步趾し、卉木の璀璨たるを玩ぶ。青青たる長松を翳とし、肅肅たる高杵を蔭とす。阻岑の絕崖に緣り、偏梁の懸閣を蹈む。石は壁立して以て天に切し、岌嵬隗として其れ落ちんと欲す。

陽平を超えて白水を越えれば、稍や幽臺にして以て迴深なり。重巒の百層を乗り、木末を九岑に轉らす。浮雲巖下より起こり、零雨麓林に集まる。上は昭晰にして以て清に陽るく、下は杳冥にして晝も陰し。山鳥の晨に鳴くを聞き、玄媛の夜に吟くを聴く。處る者の樂しむ所と雖も、嗟寂寞として予が心を愁えしむ。

前段は、車を舍めた旅の中途での、一種の遊覽、後段は、陽平關（陝西省勉縣）を越えて後の蜀での道中。蔭を落とす高木、切り立つ岩、険しい岑梁、と靜の空間を敘べる前段は一句の第一字目に「翳」「玩」「蔭」「緣」「蹈」といった張載自身の體驗の狀況を傳える語が入り、第四字目に「之」

「以」「其」が入って調子が整えられることもあって、同じく「瑰嵬」たる山谷、「鬱鬱」たる樹間等を隅なく映す畝獵賦や詠物賦の、四字句で寫す充満した非體驗的な空間とは異なつた、平明な空間描寫となつてゐる。後段は一轉して、湧き起こる雲、雨、光の明闇、鳥鳴、猿聲、と動の空間を敍べる。前半後半ともに、長安以西の蜀へ通じる道中の、どこと特定するまでもなく至る所で持續する景物の描寫であり、それを最後に「雖處者之所樂、嗟寂寞而愁予心」と結ぶ言葉は、以上の景物が、豫め潜在する心情に引きつけた心象風景でなく、道中ゆえの感傷を觸發する源として敍べられていることを裏づける。つまり、「處者」とは、山川を居とする者、さらには超俗の者を指し、『孟子』萬章上「我は豈れ畎畝の中に處り、是に由りて堯舜の道を樂しむに若かんや（我豈若處畎畝之中、由是以樂堯舜之道）」や、『莊子』在有「故に賢者は大山嶼巖の下に伏處す（故賢者伏處大山嶼巖之下）」を踏まえ、さらにその「所樂」とは、嵇康「與山巨源絶交書」に「遊山澤、觀魚鳥、心甚樂之、……安能舍其所樂、而從其所懼哉」（『文選』卷四三）と具體的に言及

潘岳「西征賦」攷（原田）

されている通りで、張載は一旦、眼前の景物を山川に居る者の心樂しみとするものと肯った上で、それが今こうして旅の進行の中で出會つたために「寂寞」なものに映るのだとしてゐるのである。景物と心情との關係が、旅↓景物↓心情という過程で描寫されている。これは、旅↓心情↓景物、もしくは心情↓旅↓景物の過程によって行われる後漢の「北征賦」や「述行賦」中の空間描寫とは異なる // 旅 // のモチーフに即した敍述態度と言え、ここに、「敍行賦」の空間描寫に於ける寫實的傾向は生じてゐるのである。

この旅は、『藝文類聚』に引用される形で見る限り、入蜀の要害である劔閣の通過を告げて結ばれている。

造劔閣之崇關、路盤曲以晦藹。……豈乾坤之分域、將隔絶乎内外。

劔閣の崇關に造りて、路盤曲して以て晦藹たり。……豈に乾坤の分域にして、將に内外を隔絶せんとす。

劔閣の様態を形容する描寫のうちに、殊更な思惟の表明は見當らない。これを見ても、「敍行賦」に於ける強烈な述志性の後退は明らかである。旅に因むいささかの不安感、

旅愁の感情を基調に持つてはいるが、決して過度には至らないのである。

以上、「敘行賦」の、洛陽・長安間について歴史的イメージの連繋で旅の進行を示す前半と、長安以南（以西）の旅途を空間の移動によって示す後半、と明確な對照を見せる構成上の特色は、それぞれ行旅賦に具わる要素の傳統を承けつつも、歴史的物語を荷ないそのイメージを喚起する地名の重點的な提示、旅の場に即した目での空間描寫、といった手法の面での變化を伴うものである。さらに、全篇通じての切迫した心情の拂拭と言ひ、それらはちょうど前に見た徐幹「序征賦」等に於ける、後漢行旅賦に對する内容・手法上の變化と傾向を同じくする。敢えて名付ければ「敘事的」ということもできるこの傾向は、建安從軍行旅賦の後で指摘した如く、同時期の多様化する文學形式の中で、何よりもまず「旅」の場に於ける「賦」であることに於て行旅賦が受け繼がれたために次第に顯著になつていったものではなからうか。では、西晉の行旅賦の中でも傑出した作品である「西征賦」に、後漢以來の行旅賦の傳統と、

建安期以下の諸傾向とは、如何なる形で吸收されたのか、早速に章を改めて検討に入りたい。

三

潘岳「西征賦」の検討に入るに當り、豫め手順を明らかにしておきたい。まず本章では、「一篇の史論」と評される「西征賦」の最も主要な要素をなす、通過する土地に因んだ歴史故事回想の部分論じる。次に第四章では、もう一つの主要部分である空間描寫を見、その二つを貫く自敘の問題を第五章で考える。

既に前章で觸れたように、行旅賦一般の歴史故事回想は、旅の道中に點在する土地の名の歌枕の機能によつて何がしかの歴史的イメージが喚起される、という仕組みより成る。それを極度に凝縮した形で示したのが張載「敘行賦」であったが、「西征賦」の場合、それとは對照的に、地名の暗示力に任せきつてしまうことなく、喚起された歴史的イメージを具體的な言葉として定着させる。すなわち、地名を

核としてそれにまつわる歴史故事を自ら手繰り寄せること
によって、そこに一個一個の歴史物語を紡ぎ出す、まさしく
鋪陳（キョウチン）の形式になっているのである。このような形で語ら
れる數多の歴史回想の單位には長・短二つの型がある。ち
ょうど、行旅賦一般に於て、一内容に費やされる句數の多
寡の差が旅程のリズムを生み出すのと同様に、句數も少な
く地名に因んだ單發的な回想で止む短い型は、その小間切
れの連續によって旅の速い進度を、一方、回想が回想を呼
び一王朝に互る長大な回想を展開する長い型は、一地點で
の徘徊や逡巡を表す、というように交々雜つて、長大な
「西征賦」に緩急のリズム變化をもたらしている。が、そ
れはさておき、個々の核となるのは何と言っても土地であ
り、しかも、土地と土地を結びゆく現實の旅の動線が、そ
のまま個々の回想を繋ぐ語りの糸として「西征賦」を貫い
ていることを念頭に置きつつ、歴史回想の敘述が如何に做
されているか、個々の例に即して見ていこう。

まずは短い單發型の歴史回想。篇内至る所に散らばるこ
の型のうちでも、とりわけ旅の前半、新安・函谷關の間で、

潘岳「西征賦」攷（原田）

新安（項羽）↓渾池（廉頗・藺相如）↓光武帝・赤眉↓崑坂（春
秋諸國）↓曹陽（周公・召公）↓（後漢末）↓曲沃（晉國）↓函谷關
（秦）↓（漢武帝）↓（曹魏）と、一見して時代の先後や内容相互
の脈絡が見出せない回想が續く一群などは目を引く。これ
こそ、道中の地名を核として開陳される歴史回想の基本を
端的に示すものと言えるだろう。さて、その一部、曹陽ほ
か陝縣の封域に入つて周公・召公を追慕し、一轉、後漢末
の董卓の亂を想起する部分は、この作品に於ける歴史故事
の内容取材とその表現手段との關係についての示唆に富む。
「我安陽に徂（こ）ぎ、言（こと）に陝郭に陟（のぼ）り、漫瀆（マク）の口（くち）に行き、曹陽
の墟（き）に憩（やす）う」と地名を擧げて、この陝を境に東西を分治し
た周公・召公を讚美する言葉は、當然のことながら『毛詩』
序に據っている。

美哉逸乎、茲土之舊也。固乃周邵之所分、二南之所交。
麟趾信於關雎、騶虞應乎鵲巢。

美なるかな逸たるかな、茲の土の舊きや。固（まこと）に乃ち周
邵の分かちし所、二南の交わる所。麟趾は關雎に信たり、
騶虞は鵲巢に應ず。

これが「關雎麟趾之化、……故繫之周公。鵠巢騶虞之德、……故繫之周公。周南邵南正始之道、王化之基」を襲っていることは明らかである。このように故事の本づく所と、故事を述べる言葉の出所が一致する明快な部分に對し、次の後漢末の回想は一轉して複雑である。

愍漢氏之剝亂、朝流亡以離析。卓滔天以大滌、劫宮廟而遷迹。……痛百寮之勤王、咸畢力以致死。分身首於鋒刃、洞胷腋以流矢。有褰裳以投岸、或攘袂以赴水。傷桴楫之偏小、撮舟中而掬指。

漢氏の剝亂し、朝は流亡して以て離析するを愍む。卓は天に滔りて以て大滌し、宮廟を劫して迹を遷す。……百寮の勤王の、咸く力を畢して以て死を致すを痛む。身首を鋒刃に分ち、胷腋を洞くに流矢を以てす。裳を褰げて以て岸に投ずる有り、或いは袂を攘げて以て水に赴く。桴楫の偏小なる、舟中に撮りて指を掬すを傷む。

元康二年の潘岳の當時からは百年しか溯らぬ、いわば近世に屬する事柄であるだけに、故事としての取材源を確定することは難しい。『文選』李善注は、范曄『後漢書』、『三國志』

魏書、華嶠『後漢書』を引くが、宋朝成立の范曄『後漢書』は論外として、他の二書に據ったことは十分考えられる。例えば引用で中略した後の部分は、李善の示す華嶠『後漢書』の「李傕等大戰弘農、百官士卒、死者不可勝數。……承先具舟船、帝以絹挽而下、餘人匍匐岸側、或自投死」と重なる記事である。しかし、或いは、この段の結句「撮舟中而掬指」と同じ典故（『左傳』宣公十二年）を用いて曹陽の戰場を描寫したテクストとして、劉艾『後漢靈獻帝紀』（『三國志』魏書董卓傳裴注引）が先行することから見て、潘岳の當時通行の諸々の雜史類や傳聞の知識に本づいた程度のものであったことも考えられる。ともあれ、ここでは固定した取材源が未だ具わらぬ近世の出來事をやはり歴史故事として述べようとしているわけである。では、その實際の表現は如何に做されているか。都落ちした獻帝一行が追いつめられていく凄慘な狀況を、生々しい臨場感のある描寫として支える言葉は、この史實と直接の關係を持たない多彩な出典に本づいている。例えば、前に示した『左傳』宣公十二年邲の戰に據る結句や、『戰國策』秦策「剝腹折頤、首

身分離一、司馬相如「子虛賦」の「弓不虛發、……洞曾達掖、絶乎心繫」、『禮記』檀弓上の「魯莊公及宋人戰于乘丘、……國人浴馬、有流矢在白肉」といった武事や戰を表す場に引かれる語に據る「分身首於鋒刃、洞曾腋以流矢」等。同じく陝縣に因む故事回想にして、周公召公讚美の部分に比べて殊更な用典の繁雜さは、故事の取材源とすべき歴史テクストの未成熟を反映するものではないか。「西征賦」中であらう一箇所、近世の事に屬する建安十六年(一一一)曹操の韓遂・馬超征伐を想起する函谷關での敘述があり、そこでもやはり同じように内容・用典の二層構造がはっきりと認められるのは、この見通しを補うものと思われる。歴史テクストとしての未成熟が近世の故事敘述に於ける多彩な典故使用に結びついた、とすれば、既に成熟した内容を持つ故事の回想の敘述の場合をも確かめてみる必要がある。次に、一王朝を通觀する長いスケールの歴史回想に即して見ていこう。

長いスケールで見る歴史回想は、洛陽出發直後(周代)、長安到着直前(秦漢の際)、長安到着後(前漢)・(秦)、それに

潘岳「西征賦」攷(原田)

やや特殊なものとして前漢名士の列傳的回想、の計五箇所がある。これら後漢以前の歴史回想については、もっと句數の少ない部分も含めて、それぞれの時代に應じて確固とした歴史テクストが既に存在した。よって、各所で語られる故事の取材源の見當はつけることができるのだが、果たして、故事を語る言葉として當該の歴史記述をそのままに攝取したのか否か、「西征賦」の敘述として表れる段階で行われた取捨の檢證が、ここで重要な課題となるのである。

洛陽出發後、「爾うして乃ち平樂を越え、街郵を過ぐ。馬を臯門まうもんに秣まぐい、駕を西周に稅す」とやはり通過する地名を提示した後で始まる周代の回想は、「遠き矣かな姬德、高辛自り興る」以下、建國から東周の赧王の時まで周一代の盛衰を時間軸に沿って辿る形で展開する。周代の記録と言え、『詩經』『尚書』、東周になると『春秋』『國語』等があり、これらはこの時代を語る言葉の寶庫である。「西征賦」に於ても、これらに直接本づく表現が専らと言ってよい。例えば、成王の代について。

考土中于斯邑、成建都而營築。既定鼎于郊鄩、遂鑽龜

而啓繇。

土中を斯の邑に考え、成都みやこを建てて營業し、既に鼎を郊鄆に定め、遂に龜を鑽きりて繇を啓く。

上二句は、『尙書』召誥「太保朝至于洛、卜宅。厥既得卜、則經營。……王來紹上帝、自服于土中」とある記事に據り、

下二句は『左傳』宣公三年の王孫滿の言「成王定鼎于郊鄆」及び、『詩經』大雅「文王有聲」の「考卜維王、宅是鎬京。

維龜正之、武王成之」に據る。言葉の本づく所は、まさにこの通りであろう。ところで、この故事は『史記』周本紀でこのように整理されている。

成王豊に在りて、召公をして復び洛邑を營むこと、武王之意の如くせしめんとす。周公復び卜して申まをねて視み、卒に營業して、九鼎を焉あなに居すまんず。

今さら言うまでもなく、『史記』の「周本紀」はじめ「五帝本紀」「夏本紀」等は、『尙書』『詩經』『左傳』他の所謂經書史書の記録に本づきつつ、それらを時間軸に沿って整理した最初の記述である。ここで、成王と洛邑(洛陽)についての故事は、豫め「周本紀」に整理されているのと同じよ

うな筋で想起され、それを元々の、より由來正しい言葉で敘述した、という過程を「西征賦」の中に見出すのは決して無理なことではなからう。さらに、東遷以後の回想で『左傳』を引く部分を見ると、事柄はいっそう明らかとなる。

平失道而來遷、繫二國而是祐。豈時王之無僻、頼先哲以長愆。

平道を失いて來遷す、繫あ二國しくも是れ祐く。豈あ時王之僻なる無からんや、先哲に頼たりて以て長く愆なり。

平王の東遷を言う上二句は、隱公六年に周公黑肩が時の桓王に説いたとして見える言葉「我周之東遷、晉鄭焉依」に本づき、「二國」とはこの「晉・鄭」。「繫」も『左傳』に散見する發聲の辭(杜預注)で、襄公十四年に「王室之不壞、繫伯舅是頼」という句形が見える。下二句は、成公八年、韓厥が晉侯に進言した言葉「三代之令王、皆數百年保天之祿。夫豈無僻王、頼長哲以免也」を襲った、潘岳自らの東遷に對する見解を示す句である。

望闕北之兩門、感虢鄭之納惠。討子頹之樂禍、尤闕西之效戾。

闕北の兩門を望み、虢鄭の惠を納るるに感ず。子頰の禍を樂しむを討ち、闕西の戾に效^{なま}えるを尤む。

周の王城の圍門・北門の名に因んで、惠王代の周室の内紛を回想するこの段は、「望」「感」という潘岳の所作を表わす語以外すべて、莊公二十年、二十一年の記事に本づいてゐる。二十年、鄭伯が虢叔に言った言葉「今王子頰歌舞不倦、樂禍也。……盍納王乎」、二十一年の記事には「鄭伯將王自圍門入、虢叔自北門入殺王子積及五大夫。鄭伯享王于闕西辟、……原伯曰、鄭伯效尤、其亦將有咎」とある。以上の経緯について、『史記』周本紀の整序を較べてみよう。

平王立ちて、東のかた雒邑に遷り、戎寇を辟^まく。平王の時、周室衰微して、諸侯の疆きもの弱きものを并す。

……

惠王の二年。……惠王温に犇^まり、已にして鄭の櫟に居る。釐王の弟積を立てて王と爲すに、樂の舞を徧くするに及び、鄭虢の君怒る。四年、鄭は虢と與に王積を伐ち殺し、復び惠王をして入らしむ。……

既に點檢してきた通り主に『左傳』に本づく言葉で敘述さ

潘岳「西征賦」攷(原田)

れている「西征賦」中の東周の各事件であるが、そこに流れる筋は、この「周本紀」で押さえられている経緯に符合している。この符合は何を意味するのか。ここで、「西征賦」と「周本紀」に共通するのは、共に周代を時間の流れに従って辿ろうとする眼で見つめていることである。そしてその通史のイメージの原典が『左傳』『國語』等であることも同じである。周知の通り、『左傳』は、魯の編年記録『春秋』を雑多な記録・説話で補う性格を持った「傳」であり、それ自體歴史記述の一典型を成すものとして後世認識されるものでもある^②。その豊富で混雜した記録・説話の中から、特に周王朝の時間の流れとして必要なだけの單純な事件経過や物事の推移を抽出し編み直した『史記』周本紀同様、「西征賦」に於て成周という土地との接觸を機に展開される周王朝一代の回想の筋は、『左傳』他の周王朝に關わる原典のテクストについての讀みの成果とすることが出来る。今、「西征賦」の周王朝回想の故事として取り込まれた内容が、たとえ『左傳』他に直接に取ったものとしても、それらが王朝一代の通史という一つの筋に整えられ

る過程で、既存の「周本紀」的なイメージがそこに與つたことは十分に考えられ、「西征賦」の取材源を『左傳』か『史記』かと推論することはそれほど重要とは思わない。むしろ、そのように「周本紀」に當ればそこに概ね摘要されているほどにオーソドックスな歴史故事の内容・筋を、既に見たような『詩經』『尚書』『左傳』等、その内容の源に直接本づく言葉で敘述が成されていることをどう捉えるべきか。例えば、特に『左傳』記事に本づく言葉など見ると、『左傳』の中でも誰某の言として記録されている臺詞部分からの引用が専らであるが、これはまさに事柄の核心に最も近い所からの言葉の選擇ではないか。『史記』等をも經て成熟した周王朝のイメージを下敷きとして、そのイメージの源に求めた言葉で敘述する、という鋪陳の構造がここにも見出せるのである。

では、他の、例えば漢代を對象とする歴史回想の故事の取材・敘述の關係にも、やはり同じことが認められるだろうか。

漢代を通しての回想は、長安到着後、歷代墓陵の地を主

として歷回る動線に従つて述べられる。墓陵の地名ごとに、その主たる皇帝が對應し、その治世の故事が想起されるこの部分は、洛陽西境の地という核一つで周王朝一代を回想した前の例に比べて、地名と歴史故事の結びつきがより強く表れているし、そのように地名ごとの別が明確な分、墓陵から墓陵へと歷回る動線が各敘述を繋ぎとめるパイプとして重要な要素となっている。さて、漢王朝に關わる故事の取材源となる歴史記述と言えば、何と言つてもまず『漢書』であり、また武帝代までなら『史記』にも記録を求めすることもできるが、その『漢書』を撮要した編年史書、荀悅『漢紀』の記載内容が、「西征賦」の右のような各代の故事の敘述に於て一定の筋を得る過程のモデルとして、ここでやはり認められるのである。以下、安陵(惠帝)陽陵(景帝)に因む回想部分を見てみよう。

越安陵而無譏，諒惠聲之寂寞。弔爰絲之正義，伏梁劍於東郭。訊景皇於陽丘，奚信譖而矜諱。隕吳嗣於局下，蓋發怒於一博。成七國之稱亂，釁助逆以誅錯。恨過聽而無討，茲沮善而勸惡。

安陵を越えて譏ること無きに、諒に惠の聲なの寂寞たり。爰絲が正義、梁劔に東郭に伏せしを弔う。景皇を陽丘に訊ぬ、爰ぞ譖を信じて矜諱なる。吳嗣を局下に隕おとせしは、蓋し怒りを一博に發す。七國の亂を稱あぐるを成し、翻かえつて逆を助けて以て錯を誅す。恨むらくは聽あやまを過りて討つこと無かりしを、茲れ善を沮おぼりて惡を勸むるなり。

惠帝に關わる事は初め二句のみである。事實上、呂後の專權下に在った惠帝のことを「無譏」と言つて咎めないのは、『漢書』惠帝紀贊「孝惠内は親親を修め、外は宰相を禮す。……寬仁の主と謂うべし。呂太后の至徳を顧損するに遭う、悲しい夫」という見解を承けたもの。二句め、『楚辭』九辯に本づく「寂寞」の形容を惠帝に冠するのは、潘岳の今の感慨の表明であろう。三句め以下は全て景帝代の事件を敍べたものだが、うち三、四句めの爰盎字は絲の故事は、惠帝と同様「安陵」の地に因む。『漢書』袁盎傳卷四九。『史記』本傳にも記載に、景帝の時、後嗣問題で梁王の怨みを買つて梁王の刺客によつて安陵郭門外で殺された、と見えるその記事を踏まえたもの。「哀絲之正義」は、本傳

贊の「袁盎雖不好學、……引義慷慨」(『史記』同)という評語に本づく。單に時間の流れだけで配するとすれば、次の陽陵(陽丘)の主、景帝の代の回想に屬して當然の故事でありながら、敢えて「安陵」に繋がれているのは、行旅賦の歴史回想ならではの土地と故事の密接さを物語るものと言えるだろう。

次の、陽陵に因む景帝三年(前一五四) 吳楚七國の亂の回想の本づく記述は『漢書』吳王濞傳(卷三五) 『史記』卷一百六。「隕吳嗣於局下」二句は、その「孝文時、……皇太子引博局提吳太子殺之」に據り、「成七國之稱亂」二句は、景帝三年七國の亂の際、景帝が袁盎の譖言を聽き入れて晁錯を斬した、と説く長い記事の要點を摘んだ形である。結びの二句は、事件に對する潘岳の見解。「過聽」は『漢書』成帝紀に成帝詔の語として、また「沮善而勸惡」の「沮勸」は『左傳』襄公二七年、衛公子鱒の語として見え、これらを用いて評される前述の回想の取材源に拘わらぬ所から選擇されていることがわかる。ところで、吳王濞なる一人物の生涯を軸とする記録である「吳王濞傳」では、「孝文時」

の博局の一件、「景帝三年」の七國反亂、それぞれが等しく吳王濞にまつわる故事として配されているのを、「西征賦」は、陽陵・景帝という別の核に配し替え、しかもその際には兩件の間にも明確な因果關係を提示している。今、荀悅『漢紀』を見てみると、孝景皇帝紀三年條に、やはり二件はまとめて關係づけて記述されていて「西征賦」の筋と符合する。

春正月、吳王濞皆謀反。初上爲太子時、吳王太子入朝、……上以博局擲之而死。……遂從其（袁盎計、斬錯東市。……。

——『漢紀』

訊景皇於陽丘、奚信譖而矜謹。隕吳嗣於局下、蓋發怒於一博。成七國之稱亂、釀助逆以誅錯。——『西征賦』

後述する通り『漢書』の撮要である『漢紀』に於て、景帝三年の記事は、當年景帝の上起きた大事件を説明するに必要なだけの故事を「吳王濞傳」から抽出して一定の筋の下に編集したものである。「西征賦」の景帝代の回想の筋がそれと符合するのは、陽陵に因む景帝代の事件の經緯を同じく「吳王濞傳」の中から取材した、という共通の過程

による讀みの結果だからと見てよい。たとえまた、潘岳が「西征賦」のために「吳王濞傳」から一々取材整理するという繁瑣な過程を持たなかったとしても、その際には、このような敘述の前提として『漢紀』景紀三年記事的な既成のイメージが介在したことが十分考えられるのである。

以上の墓陵群に因む部分に限らず、「西征賦」の漢代の故事回想で、『漢書』の記録に對する『漢紀』との讀みの符合は他にも認められる。一例として、洛陽から長安への道、湖縣閭郷に因んで武帝征和二年（前九一）の戾太子事件を回想する部分。

戾園を湖邑に弔う、諒に世の巫蠱に遭う。隱伏を明らかにし難きに探り、讒賊の趙虜に委ぬ。顯戮を儲貳に加え、肌膚を絶ちて顧みず。歸來の悲臺を作り、徒に望思するも其れ何の補いあらん。

武帝の徵行の故事を想起したのに續くこの回想の記事は、『漢書』の「戾太子傳」（卷六三）「江充傳」（卷四五）そして「武帝紀」（卷六）から取られるものであり、一方『漢紀』孝武紀征和二年にはその整序した筋が見える。今、『漢紀』

の記事と「西征賦」原文を並べて見よう。

秋七月、使使者江充掘巫蠱於太子宮。巫蠱之禍、……成於江充。……太子親臨、罵充曰、趙亡虜、……今乃亂吾父子、……江充……其罪固宜誅戮、陛下不省察、深過太子、發盛怒、舉大兵而攻之。……八月、……太子死於湖、……作思子臺於湖、天下聞而悲之。——『漢紀』

甲兵圍於湖邑、諒遭世之巫蠱。探隱伏於難明、委讒賊之趙虜。加顯戮於儲貳、絕肌膚而不顧。作歸來之悲臺、徒望思其何補。——「西征賦」

こう見てくると、前の周王朝の回想に於ける『左傳』他の周室に關する諸テクストからの故事取材過程の『史記』周本紀との符合と言ひ、ここと言ひ、「西征賦」の大部を占める歴史的内容の敘述を支える歴史記述からの取材過程もしくは既成の歴史イメージの來源について、一定のモデルが得られるのははや決して偶然とは言えない。ここで鍵となるのは、『史記』周本記や『漢紀』の存在をこの中でどう位置づけて考えるかということである。今、魏晉の當時に於ける文史の動きと直接の關係を持つ『漢紀』に即して見

潘岳「西征賦」攷(原田)

てみよう。

荀悅『漢紀』三十卷は、後漢も末の獻帝建安三年(一九八)の詔に應じて班固『漢書』百卷を年代に順つて編み直した編年體の前漢史である。その序に下詔の經緯と編修方針とが述べられているが、その一部にはこうある。

其(建安)の三年、詔ありて給事中祕書監荀悅をして漢書を鈔撰し、其の要を略舉せしむ。……悅是に於て舊書を約集し、表志を撮序し、總じて帝紀と爲し、其の事を通比するに、例年月おむねに繋ぐ。……省約にして習い易くして、本書の用に便なること有るに妨げ無し。

つまり、漢代史の要點だけを手輕に閲覽できるダイジェスト版が目的とされ、その際に時間軸に順うという基準と、刪要という手段とを二大方針としたのである。この方針が『漢紀』を、單なる『漢書』の刪省に止まらぬ、後世、編年體歴史記述の典型たらしめている因ゆゑには違ひないのだが、ともかく、この序からも、『漢書』というテクストに對する『漢紀』の立場が、今まで見てきた通り「西征賦」と同様「讀み(刪要)」と「再生(編年)」とであることは裏づけ

られるであろう。ところで、魏晉の時期の史學盛行の狀況を、一つが正史の著述、もう一つが、正史テキストの解釋、三つめがそれらの業績を享けて教養とすること、と三面に分けるとする。^②すると、『漢紀』はまさしく二番めに位置する。このようなダイジェスト版が増えることによって、知識の裾野が飛躍的に廣がるのは昔も今も變わらない一般的傾向だが、『漢紀』もその例に漏れず、これによって、『漢書』の學に格別造詣が深くなくとも士大夫ほどの者であればその要點を一わたり誦んじる道となったであろうし、或いは場合に應じて簡便なテキストで済ますことも可能であっただろう。同様の便宜は『史記』周本紀などについても見られることである。

以上のような歴史記述の側の諸狀況を傍に引き較べて見ること、複雑多岐に亘る「西征賦」の歴史故事の引用の一定の仕組みが見通せる。すなわち、潘岳が「西征賦」に於て、『左傳』『漢書』等の記事のそれぞれに完結した形態を解いて要所を抜き出し、それを自分の旅の足どりや旅に伴う時間に副って配列しなおし、そこに土地に感じて古を

思う自己の語りの世界を構築していくに當っては、當時の史學全般の傾向の中で、一定の編修を経た既成の歴史イメージが潘岳の念頭に潜在したことも十分にあり得たことだろう。また、『漢紀』などが示す、故事の取材と整序の過程のモデルが意識された場合も想定しておいてよいと思う。

しかし一方、歴史記述はあらゆる記事を時間スケールに副って配していくのに對し、「西征賦」は、あらゆる故事を時間の先後に拘らずひたすら道中の土地の列びに副って配している。「西征賦」に於て、歴史故事の整序の過程は、あくまでも土地を語るための筋を得る段階に過ぎず、それを語る言葉が改めて選擇されることによって初めて一つの世界が完結する。そこに、歴史記述との決定的な相違がある。

土地土地で、そこに因む歴史故事を述べる行旅賦は、その示す故事によって土地を案内する「土地案内記」的な作品でもある。言い換えれば、歴史故事を通じて土地を認識するわけである。潘岳「西征賦」は、それを引き継ぎながらも、歴史故事をただ記號的に示すに止まらず、一つの土地にまつわる幾つかの故事を上に見たような仕組みで齊整

し、或る筋に順って最大限に言葉を盡くす修飾を行なつたと見える。(過去を見つめる眼差し)とも言うべき視點がそこには常に流れ續けている。だからこそ、本來は土地認識の媒體のはずの歴史回想それ自體が、このように鑑賞に堪える要素として「西征賦」という作品を特徴づける結果となつてゐるのである。「西征賦」の歴史回想と土地との關係を問うことによつて、私たちは改めて行旅賦に於ける歴史故事引用の持つ意味を理解することができる。

四

「西征賦」の空間描寫は、現在の旅の空間を語るものでありながら、ここにもやはり(過去を見つめる眼差し)が介在してゐて、後漢の行旅賦や第二章で見た張載「斂行賦」のそのどちらとも異なつてゐる。

既に觸れたように、後漢の行旅賦に現れる空間は、旅人である作者の切迫した心情を反映する心象風景としての空間であつた。その最も典型をなす班彪「北征賦」の一段を、参考のため次に掲げてみよう。

潘岳「西征賦」攷(原田)

陲高平而周覽、望山谷之嵯峨。野蕭條以莽蕩、迴千里而無家。風森發以漂遙兮、谷水灌以揚波。飛雲霧之杳杳、涉積雪之皚皚。鴈鴛鴦以羣翔兮、鷓鴣鳴以嘒嘒。遊子悲其故鄉、心愴悵以傷懷。撫長劍而慨息、泣漣落而霑衣。……

高平に陲りて周く覽、山谷の嵯峨たるを望む。野は蕭條として以て莽蕩、千里を迴かにして家無し。風森發りて以て漂遙し、谷水灌ぎて以て波を揚ぐ。雲霧の杳杳たるを飛ばし、積雪の皚皚たるを渉る。鴈鴛鴦として以て羣れ翔り、鷓鴣鳴きて以て嘒嘒たり。遊子は其の故郷を悲しみ、心愴悵として以て懷を傷ましむ。長劍を撫して慨息し、泣漣落して衣を霑らす。……

「遊子悲其故郷」以下の切迫した心情の開陳に呼應するこの空間描寫は、確かに「北征賦」の抒情的傾向にとつて不可缺の要素である。そして、その描寫は、蕭條たる原野、山川、寂寥を催す點景等、眼前の景物の忠實な模寫には程遠いが、作者の心情を通して重ね見得た空漠とした空間の廣がり^⑩をそのままに伝えようとする言葉で構成されており、

少なくともここに歴史的時間の流れの下で捉えられた景物は見當らないのである。

「西征賦」の中で、まとまった形で空間描寫が行われている部分は三箇所に過ぎず、歴史回想の大部さに較べて分量的には決して多いとは言えない。しかし、この三箇所はいずれも、潘岳自身が向き合った土地を、その土地の背景にある時間の堆積を通して像として浮かび上がらせる描寫の過程を最大の特長としており、歴史回想部分と相補って、今を古によって語る「西征賦」の敘事的と言われる傾向に與かっている。そしてそこでは空間描寫の對象が三箇所とも長安であることが重大な意味を持つてくる。すなわち「長安」とは、現在、西晉治下の副都にして潘岳にとって當面の定居となる赴任地であり、同時に、昔、前漢帝國の繁榮の象徴たる帝都として有形無形の極めて豊富な歴史の意味を内藏する、という古今二重の價値を荷なう土地である。既に前章で見た通り、「西征賦」の歴史回想の半分は長安到着後のものとして語られていたが、それが、長安を「無形」の、歴史の意味の堆積から語ったものとすれば、

ここの空間描寫は、まさに「有形」の、目で確認できるはずの歴史的内容で長安を語ろうとする部分に當る。が、古と今とで長安の價値は異なる。その相違を、長安到着前、到着後、昆明池一帶の遊覽、と三箇所に亘る描寫は、それぞれ三様に捉えているのである。以下、どのように古と今とが扱われるか、順に見ていくことにしよう。

まず、長安近郊にさしかかった地點での敘述。「狹路の迫隘にして、軌踳躓として以て低仰するに倦む。秦郊を蹈みて始めて闢け、爽磴にして以て宏壯なるを豁くわくしとす」という導入の四句は、旅路の倦勞感と「秦郊」長安附近到着の安心感とを告げる、道行文の常套的設定である。續けて、四字句を基調として長安封域の地勢が列擧される。

黃壤千里、沃野彌望。華實紛敷、桑麻條暢。邪界褒斜、右濱汧隴。寶雞前鳴、甘泉後涌。面終南而背雲陽、跨平原而連嶓冢。九峻嶷嶷、太一巖巖。吐清風之颺戾、納歸雲之鬱翳。南有玄灞素滻、湯井溫谷、北有清渭濁涇、蘭池周曲。浸泱鄭白之渠、漕引淮海之粟。林茂有鄂之竹、山挺藍田之玉。

黃壤千里にして、沃野望に彌つ。華實紛敷して、桑麻條暢す。邪に褰斜ほうしゃに界し、右のかた汧隴に濱そう。寶雞前△△に鳴き、甘泉後に涌く。終南に面して雲陽を背にし、平原に跨りて蟠冢に連なる。九嶷きゅうぎ嶷ぎとして、太一たいいつ巖がん從じゆんたり。清風の颺やう戻たるを吐き、歸雲の鬱翁いつうたるを納る。南に玄灞素漣、湯井溫谷有り、北に清渭濁涇、蘭池周曲有り。浸は鄭白の渠を決し、漕は淮海の粟を引く。林は有鄂の竹を茂らし、山は藍田の玉を挺とんげんず。

ほぼ全面的な班固「西都賦」・張衡「西京賦」からの引用と組み替えである。無論、元になっている京都賦中では、一つの方位、一つの地點について三、四句費すことが珍しくないのに對し、「西征賦」は「南・北」「邪・右」「前・後」「面・跨」と、對稱的な位置關係に峻別し、二句一對で提示しており、簡便な抜粹が行われている。さらに一句一景にする際には、その景の様態の形容として「紛敷」「條暢」「巖嶷」「巖嶷」といった、これも多く漢賦に用いられる、雙聲疊韻の擬態語が積極的に組み込まれている。例えば、「表以太華終南之山、……其陰則冠以九嶷、陪以甘泉。」（西

潘岳「西征賦」攷（原田）

都賦）及び「……陳寶鳴雞在焉。於前則終南太一、……連岡乎蟠冢、……於後則高陵平原、……其遠則九嶷甘泉。」（西京賦）とそれぞれ方向ごとに列擧されている山川の名が、「西征賦」では、

寶雞前鳴、面終南而背雲陽、九嶷嶷嶷、甘泉後涌。跨平原而連蟠冢。太一巖從。

という形に組み替えられている。封域の空間描寫を、現在に即した言葉は一切使わずに過去の狀況を象徴する言葉だけで眼前のそれに充てていると言いながら、單なる引用でなくして、このように頻繁に元の句型の解體組み替えが行われているのが、この段の特長である。この手法によって、ここでは、現在西晉の長安を取り巻く地勢の、昔の漢代と變わりない狀況が描寫されている。この古今不變の空間を見ているということは、最後に「班（固）は陸海の珍藏を述べ、張（衡）は神阜隩區を敘ぶ。此れ西賓の東主に言える所以、安處の憑虛に聽ける所以なり。然りと謂わざる可けん乎」と、これもまた「西都」「西京」兩賦を踏まえつつ、東都主人・安處先生がそれぞれ西都賓・憑虛公子から傳え

聞いただけの事柄を、今自分は班固・張衡の敘述の通りに我が眼で確認したと言ふのによつて、いつそうはつきりする。つまり、これは、古の長安封域を象徴する語で今を語るることによつて古今不變の空間を浮かび上がらせる、いわば追認の空間描寫なのである。ついでながら、東の洛陽から來た潘岳が西賓・憑虛の所説を追つて肯定するのは、元の「兩都賦」「兩京賦」では東都の東主・安處が結局、西賓・憑虛を説伏してしまふという筋を逆轉させた設定と言え、これも前に擧げたと同じく京都賦の組み替えの一つであらう。

さて、これに次ぐ長安城内の空間は、古今の變容に於て捉えられる。すなわち、繁昌と充滿の昔に對する今の空虚^㉔として。その始まり「是に於て孟秋爰に謝り、聽覽の餘日、農功を巡省し、廬室を周行す」に示される季節の變化、長安令としての執務、はこれを境に語られる長安巡遊と、既に完了した洛陽長安間の旅との間に流れた時間を物語る。以下、四つの側面から古今の變容が確かめられる。

街里蕭條として、呂居散逸す。營宇寺署、肆屢管庫、

城隅に藁^{さいげい}たる者、百に一も處^おらず。——(一)

所謂 尙冠脩成、黃棘宣明、建陽昌陰、北煥南平、皆夷漫^{たいちかひとしく}に滌蕩^{ひとしく}して、其の處^{ところ}を亡いて其の名のみあり。

——(二)

爾うして乃ち長樂に階り、未央に登る。太液に汎^かび、建章に凌^{のぼ}る。駉^{ちゆうき}姿を縈りて駘盪^{たいたう}に款^たり、枏^{なん}詣を轆^くぎて承光を轆^くぐ。桂宮に徘徊して、柏梁に惆悵^{ちゆうたう}す。驚雉^{きやうぢ}は臺阪に雉^{ひな}き、狐兔は殿傍に窟^くす。何ぞ黍苗の離離として、余が思いの芒芒たる。

——(三)

洪鍾毀廟に頓^おち、乘風廢れて縣らず。禁省鞠まりて茂草と爲り、金狄灞川に遷る。

——(四)

四字、三字の句型を主とする短促なりズム、「西都」「西京」兩賦等で馴染みの、長安の宮殿他の名、という點では前の封域描寫と共通だが、ここでは、かつて讚美の對象とされた宮殿樓臺等の名を列舉した擧句に、それらが今や潰え荒廢し去った現狀が簡潔に告げられる。すなわち、古の充滿を象徴する言葉はひたすら「今」によつて否定されるために、空虚の表現のために、列べられているのである。しか

もまた、その空虚なはずのこの場に空虚が感じられないのは、ひとえに、ここに列ぶ辭句の荷なう過去の充滿したイメージに由る。前章で見た地名と歴史故事との關係と同様、これも言葉に對して時間の堆積が及ぼす力を改めて納得させる手法と言えらる。例えば、(一)のように「街里」「邑居」「營宇寺署」「肆廛管庫」が列ぶのは、「西都賦」に於ては「内は則ち街衢洞達し、閭閻は且に千ならんとす。九市場を開いて、貨別れ隊分れ、人は顧るを得ず、車は旋らすを得ず。城に闐ち郭に溢れて、旁く百廛に流る」という市中の繁華の點景としてであったものを、ここでは「蕞芮於城隅者、百不處一」と言つて閑散とした光景に結んでしまつてゐる。(二)の城内の里名の羅列も、結局「亡其處而有其名」今や故處さえ不明になつてしまつた、つまり跡形も無いことの報告に行き着く。ここで、一字の助字も挟まない全くの里名のみを羅列が、潘岳自らによる確認の不可能を表すことは、次の(三)との對比によつて裏付けを得る。(三)は宮殿樓臺の故趾巡遊を述べた後に、それらが今や「驚雉雠於臺阪、狐兔窟於殿傍」、荒廢した有様である

潘岳「西征賦」攷(原田)

ことを告げ、「芒芒」たる心情を明かすものだが、その巡遊の過程を、殿趾一々につき「階」「登」「汎」「徘徊」「惆悵」等、語り手が接して確かめる動作を冠して擧げていつている。この言い回し自體は「離騷」をはじめとする行旅遊覽の表現に於て常套的なものであるが、その多くは「登○○而○○兮、觀○○以○○」の六字句型である。一方、この「西征賦」では「階長樂、登未央」式の三字句か四字句。むしろ京都賦或いは畋獵賦系のリズムに近く、その中で漢の故趾を自らの手足で確認可能な對象として描寫するのは、ちょうど同じ對象を帝國のシンボルとして仰ぎ望む眼で描寫した京都賦の内容及び手法に對する一つの變換と見て差支えない。前の封域描寫と言ひ、「西征賦」の空間描寫に於けるこうした構造には、長安をめぐる描寫として「西都賦」「西京賦」との間でまさに陰陽をなす傾向が見出せる。その陰畫らしい傾向の最も明らかなこの無い無い盡くしの一段の最後(四)は、これもやはり「洪鍾」「乘風」「金狄」という移動可能な物「動産」の喪失した空間を示す。

三番めの昆明池の描寫。數々の景物を語るといふ點で「西征賦」中最も空間描寫らしい表現の目立つ部分であるが、これもやはり漢武帝の昔と「皇代」今との對比の下、古今の變化を象徵する相として確認されたものである。元々、元狩三年（前一二〇）「粵漢と船を用て戰逐せんと欲す、乃ち大いに昆明池を脩め、館を列ねて之を環らす。樓船を治るに、高さ十餘丈、旗織其の上に加わりて甚だ壯なり」（『漢書』食貨志下）という水戰演習場の由來を持つ昆明池。この昆明池に因む辭句は「西都賦」「西京賦」をはじめ、司馬相如「上林賦」揚雄「羽獵賦」等、漢賦の中に豊富に見えるが、それら漢賦を巧みに踏まえつつ、西晉の今、單なる池沼としての姿のみ昔日と變わらず、昔人が附與した機能——宮館・水戰演習場——は全く消失し、そして新たな再生をした、その不變・消失・變容の三段階が入り雜る空間としてここでは描出されている。

乃ち其の中に昆明池有り。其の池は則ち湯湯汗汗、……日月天に麗きて、東西に出入し、且には湯谷に似、夕には虞淵に類る。

まず、古今不變の雄大な池沼としての描寫。「日月麗天」以下四句は、『淮南子』天文訓に本づいた同巧の句が「羽獵賦」「西京賦」に見える。次は古今の對比である。

昔豫章の名宇、玄流を披いて特に起る。景星に天漢に儀り、牛女を列ねて以て雙び峙つ。萬載にして傾かざらんことを圖るも、奄かに十紀に摧落す。百尋の層觀を擢でも、今數仞の餘趾あるのみ。

「西都賦」に「集乎豫章之宇、臨乎昆明之池。左牽牛而右織女、似雲漢之無涯」とあるのを踏まえて「昔」を語る前半四句は、後半四句で、百餘年後の破壊そして「今」の殘趾、という空虚の現状を告げると對比される。ここは「昔」「今」と時をはっきり指示して、しかも六字句型を用いているためやや説明的となつていもの、この有から無への對比描寫は、長安城内の故趾描寫と共通する。それに對して、昆明池描寫を特徴づけるのは、以下に續く、昆明池の水産源としての再生を描く部分である。

振鷺于飛、鳧躍鴻漸。乘雲頡頏、隨波潏淡。淺瀾驚波、啜喋陵芑。華蓮爛於淥沼、青蕃蔚乎翠澗。

振鷺于き飛び、鳧躍り鴻漸む。雲に乗り頤り頤り、波に隨いて澹淡たり。鷺波に淺瀾し、陵次に喙喙す。華蓮渌沼に爛に、青蕃翠激に蔚なり。

水上の鳥と植物、現在の蘇生した空間を生物の躍動によつて描寫するものには違いないが、例えば「上林賦」中に「淺瀾。雲陸」「鴻鵠鵠鳴、……隨風澹淡、……喙喙菁藻」と見える形容を用いるなど、特に畋獵賦系の漢賦を意識した表現が目立つ。何氣ない用典に見えるが、實は結びで敍べられる潘岳の見解と密接な關わりを持つ。

伊れ茲の池の肇めて穿たるや、水戰を荒服に肆わざんとす。志遠きを勤めて以て武を極めんとして、良に後福に要ること無し。而るに菜蔬芣實、水物惟れ錯り、乃ち原陸より瞻なること有り。皇代に在りて物土なり、故に之を毀てども又た復す。

「皇代」今の昆明池の「菜蔬芣實」「水物」の出産源としての再生であることを、昔の、宮館で圍んだ水戰演習場という「武」の機能に比して「後福」に寄與する點で勝るとする見解は、これまで必ず過去を通じて語られ續けてきた現

潘岳「西征賦」攷(原田)

長安の空間のうち唯一「今」の價值そのものを賞揚するものと言つてよい。しかも、この武事と福利との價値の對比は、「上林賦」「羽獵賦」に於ては、畋獵の楽しみとそれに向けられる反省、現實と理想の背反、という構圖のモチーフであつた。それが西晉の昆明池に於て、かつて畋獵の樂しみを彩つた自然の風物一切が今や福利の源として、すなわちかつて理想とされた形そのもので機能している狀況は、まさに畋獵賦の内容の裏返しに當る。そしてここで、人間の附與する機能に於ける古今の差異を際立たせるのが、直前の風物描寫で畋獵賦の過去のイメージを伴う言葉によつて示された昆明池の池沼としての本來の姿の不變との對照に他ならない。やはり昆明池についても、現在の昆明池を直視するのになしに、時間のフィルターを通して得られた古今の異同の認識によつて語る空間描寫がなされているのである。それにしても、ここに描出された昆明池の姿、これはまさに「古墓翠かれて田と爲り、松柏摧かれて薪と爲る」(「古詩十九首」十四)をそのまま具體化したかのような空間ではないか。

以上三箇所の舊都長安をめぐる空間描寫は、京都賦、畋獵賦等の漢賦の象徴するような「何もかもが有った」古に對して、今を不變・空虛・變容の三通りに捉えたものであり、いずれも、ひたすら過去のイメージとの對比から得られる差異の確認によつて、今の空間を位置づける構造を持つ。ここでは、眼前の空間からいきなり即興的に景物を取り上げて示すことはなく、過去のイメージを荷ない「名」を持つ景物こそが長安の空間を構成するものとして描寫對象となつてゐる。ちよつど旅の道中に數々存在する土地のうちで、その地名が豊富な過去のイメージを荷なう土地について歴史回想が語られたと同じように、空間の中でも、そこに事柄（過去のイメージ）を見出せる「名」の有る景物を、まさにその事柄によつて語るわけである。これを（敘事的）描寫と呼べるとすれば、この空間描寫は歴史回想と共に「西征賦」の（敘事的）と言われる傾向に與かつてゐると言つて差支えない。一方また、直接に對象を見据えずに、常にその對象の後ろに堆積した時間を溯つて見るこの視線は、これもやはり歴史故事を通して土地を語る過程に見られたと

同じ（過去を見つめる眼差し）に他ならない。「西征賦」の長安の空間描寫は、この眼差しを介することによつて、三次元の空間にさらに歴史的時間の奥行きの加わつたものとなつてゐる。實は、この（過去を見つめる眼差し）を介した空間であることこそ、「西征賦」と、「北征賦」をはじめとする従來の行旅賦との間のさまざま相違のうちでも最も明瞭な相違と言つてよい。例えば本章初めて見た「北征賦」。その語り手（班彪）の心情を映す空間は、帝國崩壞の狀況下、都を落ちゆく動搖と慷慨に滿ちた心情に見合う蕭條として空漠な風景が語られた。一方「西征賦」に於ては、前に長安宮殿故趾の巡遊で確かめた通り、「跡形もなく消えた」今をも、過去の充滿と對比し、そのイメージを持つ言葉で語るることによつて空虛も空虛に見せない空間である。時間を通して見た空間の奥深さ、とも言えよう。さて、「北征賦」の空間を見る眼について考えてみると、確かに虛心な眼で空間に向かつていない點で「西征賦」と似るにしても、あくまでもそれは、空間の中に自分の心情に一致する景物を求めようとする自我中心の眼である。抒情的傾向を

持つ後漢行旅賦に於ては、この自我中心の眼は恐らく不可欠な要素である。翻つて、〈敘事的〉と言われる「西征賦」。歴史回想も空間描寫も（過去を見つめる眼差し）の介在抜きにその過程を説くことは難しい。この〈眼差し〉がそれほどこの作品と不可分なのは、やはりそれが語り手の眼に具わるものであるからに他ならない。では、何故に「西征賦」に於ては「北征賦」等のような自我中心の眼に代わつて、（過去への眼差し）が全體を貫くことになつたのか。漸く、「西征賦」に於ける自叙と〈敘事的〉傾向との關係を問うべき段階に來たようである。

五

「西征賦」の大半をなす歴史回想及び空間描寫——基本的にここでは無形・有形の相違があるだけの、共に土地の風景描寫——に於て、語り手潘岳自身は、それらを見つめる〈眼差し〉の主體として不可缺の存在である。しかしながら、既に幾つか見てきた通り、各所で語られる事柄を直接に喚起するのは各所の名であり、潘岳の短い評や感慨も

潘岳「西征賦」攷（原田）

その名と事柄とが築く世界に應じる付隨的な形で現われ、全篇に互つて、土地に因む回想の敘述が主、自己表白は客、という極めて控え目な語り手が見出されるのである。それは言わば「私は○○という土地に着いた。ああそう言えばここではかつて○○が○○をしたのだ。そうして……」ということになつたのだ。何とまあ數奇なことだろう」的な敘述の型であり、これ全體は歴史回想部の長さを除けば道行文の定型を踏むだけに見えるが、結びの感想は回想の前提なしには成り立たない受動的な立場に在る。つまり「西征賦」の各所に點綴されている種々の感慨や評は、あくまでも土地と故事に即應して導かれた産物であり、「北征賦」や「述行賦」の自己表白が、土地と故事にかこつけ類比された、語り手に内在する思念であるのとは明らかに異なる。「西征賦」に於て核心としての自己とは、各所で對象を見つめ、見た對象に感應する主體として機能しているそれに他ならない。實に、それが機能しないことには旅の空間を見ることもまた感慨も、敘述され得ない。そのような「西征賦」全體の語り手「わたくし」潘岳自身がこの場

に臨む自意識は、この作品の自序③とも言うべき篇首の一段ではつきりと示されている。

第一章で既に紹介した出發宣言の次に始まる「自序」は「古往今來、邈たる矣悠たる哉。……生に脩短の命有り、位に通塞の遇有り。鬼神も能く要むること莫く、聖智あらかじも豫めすること能わず」という、運命觀であるには違いないにしても、測り知れない轉變の極まりなさを諦めるような一種投げ槍な調子の所見がまず提示される。續いて西晉當時の社會狀況と絡めつつ潘岳自身の自意識が明かされる。そこで目立つのは、潘岳の他の作品、例えば「閑居賦」や「秋興賦」等でも頻りに見出されるのと同様の、自分を「つまらぬ卑しい人間」と卑下する表現である。

「休明の盛世に當り、菲薄の陋質を託す」

「嗟鄙夫の常累、固に既に得て失わんことを思う」

「山潛の逸士の、卓として長に往きて反らざるを悟り、吾人の拘攀せられて、飄として萍のごとく浮きて蓬のごとく轉ぶを陋とす」

通常の士大夫の意識から判断すれば甚だ異色な自意識であ

るにせよ、常から方々で語られているとなると、ここでこの「卑陋」な自意識が持ち込まれているのは、「西征賦」の旅に臨む潘岳の自意識がむしろ平常のまま、この場で緊急に告白しなければならぬ性質のものではないことの證しと言えるだろう。試みに潘岳の「西征賦」以外の作品中で、やはり「行旅」の文學とされる「在懷縣作」「河陽縣作」〔文選〕卷二六〕を見ると、そこにも「卑陋」な自意識が表れている。例えば、

「微身輕蟬翼 微身は蟬翼より輕さも、

弱冠忝嘉招 弱冠にして嘉招を、忝かたじけなくす」

「徒恨良時泰 徒いたずらに恨む 良時の泰くして

小人道遂消 小人の道遂に消ゆるを。

譬如野田蓬 譬うれば野田の蓬の

幹流隨風飄 幹流して風に隨つて飄えるが如し」

〔河陽縣作〕其二〕

「虛薄乏時用 虛薄にして時用に乏しく

位微名日卑 位は微にして名は日に卑ひくし」

〔在懷縣作〕其二〕

この「河陽縣作」第一首を以て高橋和巳氏は「自己の俗物性を露出しても恥じないまでに自己に拘わる顯著な自敘性」³³という特異性を指摘された。なるほど五言詩に於ては、この自意識がそう働いたかも知れないが、今「西征賦」に於ては、むしろ別の機能を果たしているように見える。すなわち常の通りの「卑陋」な自意識で旅の場に臨むことによって、わざわざこの場でその自意識を披瀝する必要が失われ、相對的に旅の場を語る餘裕が生じる。のみならず、この「卑陋」な自意識ゆえに旅の空間に臨む謙虚な眼が獲得され、旅の場に即して旅の場を語る〈敘事的〉敘述の要因となるのである。

具體的に、まず語る對象が自己の心でなく旅になるということ。これは従來の行旅賦と對照できる。焦點は、元々日常生活を離れた非日常の場である「旅」に臨む旅人の意識の相違による旅人と「旅」の關係の相違、例えば「北征賦」などは語り手の心からして動轉し切迫した緊急の状態で非日常の旅に投じ、旅の場の敘述そのものよりも自己の思念を旅の場に類比して語るのが主眼となる。そこでは

潘岳「西征賦」攷(原田)

語り手の意識が露出して主、外界は客、という關係が見出される。ちょうどそれと逆に「西征賦」の、旅の場に即した敘述は、特殊ではあるけれども緊急な告白を要しない常の自己で非日常の旅の場に臨むところから生じた、外界が主語り手の意識は見え隠れする客、という關係に由來するのである。しかも、その自意識が「ちっぽけなわたくし」であることは、旅の場で向き合う一切の外界に對する語り手の謙虚な立場に繋がる。いわば小さな自分を取り巻く大きな外界。「西征賦」の中では「卑陋」な語り手潘岳は常に大きな旅の空間に取り巻かれている。それはまず篇首の「休明の盛世」に於ける「菲薄の陋質」という、西晉社會の中の潘岳の相對的關係づけにも端的に表れていて、この關係はそのまま道中の外界と語り手潘岳との間にも持ち越される。まさに、大きな未知の空間を前にして謙虚な眼で見つめる小さな自己、つまり、對象と主體の關係として。「卑陋」な自分であるから、自分の思想や感情を投影させる場としてでなく風景を見る眼がここに獲得される。そして、その見る裝置としては〈過去への眼差し〉、すなわち眼前

の土地・空間について恐らく最も力強い意味を示す歴史的時間の堆積を通して見、語っているのである。

「河陽縣作」に即した高橋氏の指摘に明らかなように、場合によっては深刻な自叙性にも直結する潘岳の「卑陋」な自己設定は、こと「西征賦」に即しては、このように謙虚に対象を見つめる眼、旅の場に即した語りの主體、としてむしろ対象の描寫を主とする敘述、〈敘事的〉傾向に、大きく寄與しているのである。

こうした「卑陋なわたくし」という特殊な自意識に本づく語りの世界は、確かに潘岳「西征賦」に固有の世界に相違ない。しかし、一方、行旅賦の流變の中で見れば、「西征賦」が従來の行旅賦の單なる繼承よりはむしろ行旅賦の新たな在り方を示す作品となるに當って、この自意識は必須であったとも言える。すなわち、「西征賦」は小さな自己意識に據って語ること、従來より以上に「旅」のモチーフに忠實で旅の空間に即した行旅賦たるを得た。ここに於て、まさに、殊更に切迫した感情や思念の介入を必ずしも要しない、「旅」のモチーフをこそ主軸とする表現

の場としての行旅賦の在り方が實現されているのである。

これは、「北征賦」等後漢の行旅賦の後、建安從軍行旅賦や張載「敘行賦」中に萌した傾向の、よりははっきりと具體的な成就として位置づけることができるだろう。さてまた、潘岳以降に於て行旅賦があまり見當らなくなることは事實であるが、それでも、東晉、袁宏「東征賦」「北征賦」、郭璞「流寓賦」、宋、謝靈運「撰征賦」「歸塗賦」等、さまざまな外的情況に本づいた行旅賦が作られている。そのうち例えば、袁宏の二賦、謝靈運の「撰征賦」は、從軍の情況下の作品でしかも政權者への追従の要素が混入しているといふことで正當な評價の対象から外されてしまっているが、これらとて、自己表白に拘わらず「旅」そのものをモチーフとする作品として「西征賦」とさして變わらぬ、行旅賦の範疇内で扱えるものである。^③ 行旅賦は「西征賦」を介して、謝靈運「歸塗賦」序(前掲)に見えるように多様な外的要因を持つ旅の表現の場へとさらに一回り幅を擴げた、と言えるだろう。

結 び

西征の旅の初期、新安で幼子を亡くし葬ったことを潘岳は「西征賦」に記す。

赤子を新安に天し、路側に坎して之を瘞む。亭に千秋の號有るも、子には七旬の期無し。

わずかに四句、道中で身邊の出來事を言及するのはここ一箇所きりである。その稀少な例が、わが子の死を弔う内容であるのは、やはり、哀悼の文學で知られる潘岳の面目が發揮されたものとも言えよう。このように極めて個人的な生活の中の出來事も、「新安」という土地を意味づける「故事」として、ここでは他の幾多の歴史的事件と同等の役割を果たしている。これはいわば自己の生活の「歴史化」に他ならない。こうして、「西征賦」に於ては、あらゆる事柄が旅の空間を構成する要素として同等に組み込まれる。その過程は、或いは歴史記述の抄撮過程に符合し、或いは漢賦の陰畫とも言ふべき對照をなす等、これまで見てきたような變換・組替えを経て、長大な歴史敘事的世界を形成し

潘岳「西征賦」攷(原田)

ている。一般に私たちが歴史を認識するのは時間のスケールによるが、ここでは、その一切を旅の空間・土地という軸に配し替える一種の構造變換が見出されるのである。

「西征賦」は紛れもなく「潘子」潘岳が「過去への眼差し」を通して自らの旅の空間を語る、巨大な自然の世界である。が、それは以上見てきた通り、敘事的とか抒情的とか通り一遍の範別がもはや及びもしないほどに、多様多様な要素が見事に織りなしている。これを以て「潘岳は」美を西征に鍾め」(『文心雕龍』才略篇)と言った劉勰の評こそは、この「西征賦」の世界に最もふさわしいものではないだろうか。

注

- ① 大岡昇平「歴史小説論」(『現代文學の發見』第十二卷・一九六八年・學藝書林)「歴史小説の問題」(『文學界』一九七四年六月號。共に『歴史小説論』一九九〇年・岩波書店同時代ライブラリー47に収録)
- ② 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』第二章「玄儒文史」(一九八六年・同朋舎)
- ③ 『文選』卷四九・五〇に「史論」「史述贊」の項目の下「漢

書』、干寶『晉紀』、范曄『後漢書』、沈約『宋書』の論贊が抜粋収録されている。本来歴史記述の一部として書かれたこれら文章を「篇什」すなわち文學的文章としても考えるべきことの示唆と言え、後には非検討を要する對象と思う。

④ 高光復『賦史述略』(一九八七年・東北師範大學出版社) 第六章「賦的復興」

⑤ ここは李善注に據る。陳垣『二十史朔閏表』に據れば、元康二年五月は丁丑の朔だから「乙未」は十九日。

⑥ 「西征賦」題下李善注の引く臧榮緒『晉書』に「岳爲長安令、作西征賦述行歷、論所經人物山水」とある。

⑦ 『文選』では「紀行」、『藝文類聚』『歷代賦彙』では「行旅」。伊藤正文「所謂〈紀行〉賦について——〈遂初賦〉へ北征賦」をめぐる(『小尾博士古稀記念中國學論集』一九八三年・汲古書院)はへ／＼付で「紀行」を用いておられる。また拙論「賦史に於ける班氏「紀行」二賦の意義」(『お茶の水女子大學中國文學會報』第六號、一九八七年)でも便宜上「紀行」を採ったが、やはり「行旅賦」と總稱して差支えない。

⑧ 伊藤正文前掲⑦論文。同「續所謂〈紀行〉賦について——〈述行賦〉をめぐる——」(『岡村教授退官記念論集中國詩人論』一九八六年・汲古書院)、同「漢代文學抒情化と〈文心雕龍〉——漢賦をめぐる——」(『古田教授退官記念中國文學語學論集』一九八五年・汲古書院)に詳論がある。

⑨ 高光復前掲④書。

⑩ 中島千秋『賦の成立と展開』(一九六三年)第五章「漢賦の展開」四五九頁。

⑪ ここで〈敘事的〉と記すのは、無論西洋の敘事詩。それから来る敘事の概念と區別して考えるためである。今この〈敘事的〉とは、陸機の「賦體物而劉亮」(「文賦」、劉勰の「賦者、鋪也。鋪採摛文、體物寫志也」)「文心雕龍」詮賦篇で定義されるような、辭賦本來の鋪陳の性質を主として含意しており、英雄の功業を物語る epic とは焦點を異にする。ただここで〈敘事的〉としたのは、この鋪陳が單なる羅列ではなく、本論が明らかにするような一種の物語性を持つことを示そうと思うためである。なお、賦と敘事詩については、清水茂「語りの文學——賦と敘事詩」(『中國文學の比較文學的研究』一九八六年・汲古書院。のち『語りの文學』一九八八年・筑摩書房所收)に詳しい。

⑫ 『建安七子集』(一九八九年・中華書局)附録。

⑬ 「十三年……秋七月、公南征劉表。……十二月、……公至赤壁、……十四年春三月、軍至譙、作輕舟、治水軍。秋七月、自過入淮、出肥水、軍合肥」

⑭ 例えば、「北征賦」では、具體的な季節・時日の提示は見られず、班昭「東征賦」は冒頭に「惟永初之有七兮、余隨子乎東征。時孟春之吉日兮、撰良辰而將行」と記すものの、それ以後は旅の時間の経過を示す語はやはり見られない。出發の日付けの提示を除いては、時間の推移についてあまり顧慮さ

れていない傾向があり、興味が旅の場そのものにあるのでないことにも關わる。

⑮ 他的作品は「武功」（正集卷六五）に配される。

⑯ 王祭「從軍詩」（『文選』卷二七）「七哀詩」（同卷二三）曹植「贈白馬王彪」「又贈丁儀王粲」（同卷二四）等。無論、そこには古詩等の影響も大きく、一概に「旅」というだけで括することはできないが、いずれは全體的見通しを立てるべき問題であろう。

⑰ 一海知義「西晉の詩人張協について」（『中國文學報』第七冊・一九五七年）では、太康六年（二八五）の可能性を示しておられる。

⑱ 例えば、班彪「北征賦」に「乘陵崗以登降、息郇郿之邑鄉。慕公劉之遺德、及行葦之不傷。彼何生之優渥、我獨權此殃。……」等、地名を擧げる句の次には何らかの述懐が入ることの方が多い。

⑲ 「北征賦」の空間描寫の特性については、後に第四章で示す。また前掲⑦⑧論文參照。

⑳ 「賦」の修辭・内容兩面に關わる「鋪陳」の定義については、前掲注⑩及び中島千秋前掲⑩書、第一章「歌い方」としての賦」を參照。

㉑ 「……其餘不得渡者甚衆、復遣船收諸、不得渡者、皆爭攀船、船上人以刃櫟斷其指、舟中之指可掬」

㉒ ここで具體的に「歴史テクスト」として指すのは、單なる

潘岳「西征賦」攷（原田）

記録や史料の段階を超えて、一定の撰述を経た、規範としての價值を持つ歴史記述のこと。例えば『史記』『漢書』『左傳』『漢紀』等。

㉓ 「愷韓馬之大愆、阻關谷以稱亂。魏武赫以霆震、奉義辭以伐叛。彼雖衆焉用、故制勝於廟算。擘揚桴以振塵、繼瓦解而冰泮。超遂遁而奔狄、甲卒化爲京觀。事件の概要は、『魏志』武帝紀、建安十六年の記載「馬超與韓遂……等叛。……秋七月、公西征、與超等夾關而軍。……公自潼關北渡、未濟、超赴船急戰。……公乃多設疑兵、潛以舟載兵入渭、爲浮橋。……九月……遂超等走涼州、楊秋奔安定、關中平。……公答曰、關中長遠、若賦各依險阻、征之、不二年不可定也。今皆來集、其衆雖多、莫相歸服、軍無適主、一舉可滅、……」によって迎れるが、その一句一句の表現は専ら『尚書』『左傳』『漢書』等に本づく、この情況に合致する語辭が用いられている。

㉔ 『漢書』司馬遷傳贊「……故司馬遷據左氏國語、采世本戰國策、述楚漢春秋、接其後事、訖于漢」（卷六二）

㉕ 服虔注に據れば「繁、蒙也。潘岳が『左傳』を杜預注で讀んだのは不明な點であるが、とりあえず杜預注を當てた。

㉖ 『史通』六家篇に史書の體裁六家の一として左傳家を擧げる。「……其流有六、一曰尚書家、二曰春秋家、三曰左傳家、……」

㉗ 「永始元年、秋七月、詔曰、……過聽將作大匠萬年言昌陵

三年可成。……」

⑳ 『史通』六家篇に「所在史官、記其國事、爲紀傳者則規模班馬、創編年者則議擬荀爽。」

㉑ 例えば、吉川忠夫「顔師古の『漢書』注」(『六朝精神史研究』一九八四年・同朋舎)で、『漢書』の受容のありかたについて、抄録と注釋との段階を見出して論じておられる(「顔師古以前における漢書の學」参照)。また内藤湖南「支那史學史」(全集第十一卷・一九六九年・筑摩書房)七「史記漢書以後の史書の發展」。

㉒ 例えば、『三國志演義』の直接本づいた史書が『三國志』そのものではなく、それを編年化した『資治通鑑』、さらにそのぬき書『資治通鑑綱目』や『十七史詳節』といった抄撮の書であったことなどは實に好例である。小川環樹「『三國演義』の本づいた史書」(『中國小説史の研究』一九七八年・岩波書店)を参照。

㉓ 戸倉英美「漢魏六朝詩の時空表現」(『詩人たちの時空』——漢賦から唐詩へ——)一九八八年・平凡社)では「北征賦」のこの描寫を採り上げ、漢賦の空間に敵對する空曠の空間の發見に結びつけておられる。

㉔ 司馬相如「上林賦」に「九嶷巖、南山峩峩」という、より合致する句も見えるが、要するに既成のイメージに據ったのだと思う。

㉕ この直前に長安到着時を告げる一節がある。「都中雜選、戶

千人億。華夷士女、駢田逼側」と明らかに「西京」「西都」賦を踏まえて長安の繁昌を描寫したものが、續く「街里蕭條、……」の光景との對照が著しい。高橋和巳氏はこれを以て潘岳の「否定的な修辭法」(『潘岳論』)の典型として扱っておられる。確かにそうかも知れないが、「西征賦」の旅の描寫全體の構成から見ると、初めの都中の喧噪は道中から解放された旅人が「ここがああ長安だ」という目新しさと過去のイメージに眩んだ眼で見た姿、洛陽から續いた「旅」の時空間の末端部に屬し、その後の空虚の確認は、到着から時を経て平靜を回復した眼で見た姿、この後ずっと續く古今長安の巡禮の世界に屬し、言わば「西征賦」中の行旅・巡遊兩部の轉換點に位置するため、兩部それぞれの傾向の相違が、この對照として端的に表れていると讀める。

㉖ 「日月於是乎出入、象扶桑與濛汜」(『西京賦』)「出入日月、天與地沓」(『羽獵賦』)。共に『淮南子』天文訓「日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、……至于淵虞……、日入于虞淵之汜、暘于蒙谷之浦」を源とする。この型を潘岳も襲ったのだろう。

㉗ 「西征賦」では昆明池描寫に續けてさらに昆明池の恵みの享受が延々と語られる。「凡厥寮司、既富而教。威帥貧情、同整穢權。收置課獲、引繳擧效。鰥夫有室、愁民以樂。……廻小人之腹、爲君子之慮。これは明らかに「上林賦」の君主の戒言に見える言葉「發倉粟以救貧窮、補不足。恤鰥寡、存孤獨。……」が、ここに實現していることを示す。これによ

つても昆明池をめぐる「西征賦」の歌獵賦に對する陰畫的描寫の意圖は確かめられる。

③⑥ 潘岳の抒情的な賦「秋興賦」「閑居賦」「懷舊賦」に於ける散文の序の役割の重大さについて與膳宏教授『潘岳・陸機』（一九七三年・筑摩書房）は「賦の抒情を外側から補強するもの」「序と本文との相即的な合體關係において、一つの文學の圓環を完成させることを、彼は最初から意圖していた」という指摘をされている。「西征賦」の冒頭篇首は、「自序」として冠してはいないものの、内容の上からは如上の抒情賦の序と同様に見做してよいものである。その内容的に同様の一段が、賦の本文として組み込まれているのは、外界と自己との關係を、包括される自己という形で語る「西征賦」全體の構造を徹底させる積極的な意圖に本づくものと考えられる。冒頭にいち早く「潘子憑軾西征」と自らを客觀化して登場させている手法と共に、この作品の「旅」の世界を物語る構造の一つの表れとも言えよう。

③⑦ 「僕野人也、偃息不過茅屋茂林之下、談話不過農夫田父之客。攝官承乏、猥則朝列、……」（「秋興賦」序）「普通人和長與之論余也、固謂拙於用多。稱多則吾豈敢、言拙信而有徵。」

……」（「閑居賦」序）

③⑧ 高橋和巳「潘岳論」（『中國文學報』第七冊・一九五七年）。また、「閑居賦」の場合については、與膳教授前掲③⑥書、及び齋藤希史「〈居〉の文學——六朝山水／隱逸文學への一視座

潘岳「西征賦」攷（原田）

——」（『中國文學報』第四二冊・一九九〇年）に詳論があり、一つの「卑陋」な自意識が作品その場に應じて個々の役割を果たすことを考える上で示唆を得た。

③⑨ 狩野直喜『魏晉學術考』（一九六八年・筑摩書房）では、袁宏の作品のうち優れたものとして「東征賦」「北征賦」を論じておられる。また謝靈運「撰征賦」を潘岳「西征賦」に倣ったものとして位置づけるのは、馬積高『賦史』（一九八七年・上海古籍出版社）二〇二頁。